

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月30日現在

機関番号：35305
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22520639

研究課題名（和文）英語の受動的能力におけるメタ認知ストラテジーの働きとその育成プラン
 研究課題名（英文）Investigating the Relationship between Metacognitive Strategies and Receptive Skills in English of Non-English-Major University Students

研究代表者

高橋 幸子（TAKAHASHI SACHIKO）
 ノートルダム清心女子大学・文学部・教授
 研究者番号：50299244

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、英語を専攻としない大学生を対象として、メタ認知ストラテジー育成プランを実施し、メタ認知ストラテジーと英語リーディング力・英語リスニング力との関連を探ることであった。主な結果として、毎週課題提出をさせること（小さな目標設定と実現）や、毎週小テストをすること（自分の能力確認）が、リーディングとリスニングの能力を伸ばしていくことが確認された。こうした活動が、メタ認知ストラテジーの力を育成していくものと考えられる。

研究成果の概要（英文）：The goal of this study was to investigate the relationship between metacognitive strategies and receptive skills in English of non-English-major university students. The main results show that submitting assignments every week (accumulating small goals) and conducting mini-tests every week (self-monitoring) were activities which can increase students' receptive skills.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、外国語教育

キーワード：英語教育・受動的能力・メタ認知ストラテジー・よい学習者・リーディング・リスニング・授業外活動・学習者ビリーフ

1. 研究開始当初の背景

メタ認知ストラテジーは、学習方略の一つの方略である。認知ストラテジーと同様に、学習方略の大切な構成要素である。学習方略の分類に関する研究の中で、メタ認知ストラテジーの働きは、学習を計画したり、モニターしたり、評価したりするものだと説明されている（O'Malley, Chamot,

Stewner-Manzares, Kupper, and Russo, 1985; Oxford, 1990)。メタ認知ストラテジーは、学習者のコミュニケーション能力を伸ばす大切な原動力であるとする研究者がいるにもかかわらず、その本質と育成方法に関しては、いまだに解明されていなかった。第二言語のリーディングにおいても、メタ認知ストラテジーについての研究がある。

Oakhill and Cain(1997) は、リーディングの習熟度の違いは、学習者が持つメタ認知モニタリングの違いにあるのではないかと述べている。彼らは、リーディングに優れている者は学習プロセスをコントロールでき、困難なことに会った時に解決する戦略を持っていると主張する。このことから、メタ認知戦略を育成することによって、英語リーディング力を伸ばすという提案がされた。また、同じ受動的能力であるリスニングに関しても、リーディングと同様に、学習者が自分のリスニング・プロセスをモニターすることにより、リスニング力が向上するものと予想された。ほとんどの学習者は、メタ認知戦略が持つ自己内省力の重要性には気づいていない。したがって、自分自身の学習プロセスにもっと注意を向けることによって、学習に対する意識を変え、学習成果を変えることができるという仮説が提案された。

本研究者は、「日本人大学生の英語リーディングにおける成功と失敗に関する意識調査」(Takahashi, 2003)の中で、多くの学生が自分たちの能力不足を強く感じていることを明らかにした。学生のほとんどは、英語を教養科目として学ぶ、いわゆる「英語を専攻としない学生」であった。その研究の中では、学習者が抱えている苦手意識を克服するために、「よい学習者」が持っていると考えられるメタ認知戦略を育てることが提案された。「よい学習者」のメタ認知戦略とは、上記で述べたように、学習者が、自分の言語学習プロセスを客観的に評価し、学習における問題を解決していく方略である。メタ認知戦略を持つ学習者は、苦手意識を克服する解決法を見つけ出すことができると考えられた。

2. 研究の目的

本研究の具体的な目的は、英語の受動的能力における日本人大学生のメタ認知戦略の働きを明らかにするために、英語を専攻としない大学生を対象として、メタ認知戦略育成プランを実施し、メタ認知戦略と英語の受動的能力との関連を探ることであった。メタ認知戦略を育成することにより、英語を苦手とする大学生を「よい学習者」に育てるメタ認知戦略の働きを明らかにすることができると考えた。

2010年度～2011年度にはリーディング、2011年度～2012年度にはリスニングに焦点を絞り、それぞれのスキルを伸ばすことを目的として、研究を行った。本研究では、どのようにメタ認知戦略を伸ばし、それを測定できるかというところに注目しているため、研究期間内で研究方法に変更を加え

ている。期間内の研究を次の2つに分け、それぞれの目的を挙げる。

(1) 研究1

調査対象者を、実験群と統制群に分けた場合、

① 実験群は、統制群より英語リーディングの能力を伸ばすことができるだろうか？

② 実験群の調査対象者のリーディングに対するビリーフはどのように変化するか？

(2) 研究2

① 小テストをすることによって、調査対象者は英語リスニングの能力を伸ばすことができるだろうか？

② 調査対象者のリスニングに対するビリーフは、どのように変化するか？

3. 研究の方法

(1) 研究1

① 調査対象者

4年制大学に通う日本人大学生1年生93名である。大学入学の形態は、一般入試、推薦入試、センター試験入試と、さまざまである。大学の偏差値は、大手予備校各社の平均値51～53である。したがって、日本の大学の中間値より少し上を示しているため、多くの日本人大学生に起こる現象を説明できると考えられた。調査対象者は、英語を専攻とする学習者ではない。週2回の内、1回を本研究による授業を受け、残り1回を英語母語話者による授業を受けていた。

② 手順

実験群と統制群に、同じ量と質のインプットを与えた。実験群のみに、メタ認知戦略育成プランを受けさせた。この育成プランは、毎回の授業外活動時に、自己評価シート(高橋 2008)に記入させていくものであった。このことにより、実験群の調査対象者は自分自身の学習プロセスに注目するようになり、英語活動における自己内省力を育てていくと予想された。週1回の授業の中では、精読・精聴・リーディングスキルを伸ばす訓練を行い、授業外では、コンピュータを使った多読活動をさせ、調査対象者へのインプットを増やした。プリテストとポストテストには、標準化されたテストのリーディング・セクションを用いた。

実験群	統制群
プリテスト	プリテスト
↓	↓
授業内活動+授業外活動+メタ認知戦略育成プラン(12週)	授業内活動+授業外活動
↓	(12週)
ポストテスト	↓ ポストテスト

図1. 調査対象者が受けたトリートメント

(2) 研究 2

① 調査対象者

研究 2 は、研究 1 と同じ大学で、英語を専攻としない日本人大学生 1 年生 53 名を対象にして行われた。この研究は、研究 1 の翌年度に行われたため、研究 1 の対象者とは異なっているが、入学試験結果から考えて、研究 1 の調査対象者とほとんど同質の学習者であると考えられた。英語に関して受けていたインプットの量と質に関しても、まったく同じである。研究 2 においては、調査対象者は、実験群のみとなっている。

② 手順

研究 2 におけるメタ認知ストラテジー育成プランは、学期の初めに開始し、学期の終わりに終了する 12 週間のプランである（図 2 を参照）。学習者ビリーフの変化を観るアンケート記入も、プリテスト・ポストテストの実施と同時にいった。研究 2 におけるプリテストとポストテストは、リスニング・構文・リーディングのそれぞれの能力を測る標準化されたテストである。

メタ認知育成プランは、「授業」＋「授業外活動」＋「小テスト」から成る。研究 1 の研究方法に対する示唆により、メタ認知ストラテジーを上げる工夫であるアンケート記入を廃止し、その代わりに、調査対象者が、自分自身の現在のリスニング力を意識する小テストを授業中に行うことにした。メタ認知ストラテジーの一つである自己モニタリング力は、小テストによって、より明確に意識されると予測された。

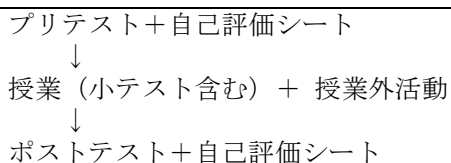


図 2. 調査対象者が受けるトリートメント

4. 研究成果

(1) 研究 1

両群のポストテストのスコアを従属変数とし、プリテストのスコアを共変数とした共分散分析を行ったところ、実験群、統制群の間に有意な差はなかった。

また、学習者ビリーフに関する質問項目に対して、4 段階のリカート尺度 (e. g. とてもよく分かった～まったく分からなかった) で答えてもらったところ、育成プラン実施前と後で比べた時に、テキストの理解度と満足度において、プラスの方向に有意の差が出た。

リーディング・テストにおけるスコアを比べる限りでは、実験群が統制群を上回ることはなかった。両群共に、スコアは、調査期間後に、期間前より、有意の差で伸びていた。

メタ認知ストラテジーを働かせるために使用した自己評価シートは、機能しなかったことになる。しかしながら、英語の時間が大学受験前の高校の時よりも格段の差で減っている非英語専攻の学習者のリーディング力が伸びているという事実は、なんらかのメタ認知ストラテジーが両群に働いたとも考えられる。これは、アンケートの下位項目のすべてがプラスの方向に変わったことから、当初意図していた自己評価シートではなく、メタ認知ストラテジーを引き起こす別の何か、実験群と統制群に働いたものと推測された。両群ともに共通することは、一回も休んだ学生がいなかったことと、毎回の課題提出を欠かしたことがなかったことであった。

(2) 研究 2

英語リスニングのポストテストの結果は、プリテストの結果よりも有意の差で優れていた ($t(51) = -3.66, p < .001$)。

学習者ビリーフに関しては、質問項目に対して、4 段階のリカート尺度 (e. g. とてもよく分かった～まったく分からなかった) で、答えてもらった。その結果、理解度と満足度に関して、調査対象者のメタ認知育成ストラテジー育成プラン実施の前後に有意の差が出ていた。

(3) 2 つの研究のまとめ

2 つの研究から得たことは、以下のとおりである。

研究 1 では、実験群と統制群とを比べて、実験群にメタ認知ストラテジー育成プランを加えたにもかかわらず、統制群も実験群と同じくらいにリーディング力において伸びを見せた。本研究者が意図したメタ認知ストラテジー育成を仕掛けるもの以外のものが、実験群と統制群において働いたわけである。両群に共通することを考えると、調査対象者の中に欠席者がいなかったことと、課題提出を怠らなかったことである。このことにより、次のことを推測することができる。目の前の小さな目標を実現していくことが、実験群・統制群共に、メタ認知ストラテジーを働かせることになり、最終的に、リーディング力を伸ばしていくことになったのではないかと

いうことである。研究 2 では、実験群のみ設定して、毎回小テストをしていくことによって、自己モニタリング力を上げていくことを工夫した。この小テスト実施によって、調査対象者のリスニング力は、調査期間後には、有意の差で、開始前より伸びた。学習者ビリーフに関しても、調査期間後に、プラスの方向に有意の差で動いていた。この結果からも、小さな目標設定と実現が、メタ認知ストラテジーを働かせることになり、リスニング力の伸びに関係した

と考えられる。

大学受験を終えた大学生は、英語を勉強する大きな目標を失う。ほとんどの大学では、そのカリキュラムの中で、専門性を問う授業が多くなり、英語の基礎力を養う機会を失ってしまう。また、学生側も、英語を勉強する意味を見出すことができない。学習することにながしかの効力を見出すには、そこに成功感(達成感)を導き出さなければいけない。学習者のピラーの形成に欠かせない要素に自己効力が挙げられるが、その自己効力は、過去の達成、観察などによる学習、他者からの励まし、個人の心理的な反応(不安や自信)で構成されているとする(Bandura, 1993)。

英語における達成感とは、何と言っても、自分のメッセージを相手に伝えることができるという自信によって作られていくのだろう。その達成感を得るためには、英語の受動的な能力を伸ばすだけでなく、生産的な能力を伸ばすことも必要である。本研究で焦点を当てたメタ認知ストラテジーは、英語の生産的な能力を伸ばすことに役立つと考えられる。今後、学習の良い回転を促進していくメタ認知ストラテジーの働きを明らかにすることは大学生の学習に意味があるだろう。学習の良い回転は、良い学習者としてのピラーを形成する。そして、よい学習者としてのピラーの形成は、メタ認知ストラテジーを上手に働かせることと密接な関係があると考えられる。次の研究目的は、メタ認知ストラテジーの働きをさらに明らかにし、よい学習者としてのピラー形成と英語力(受動的な能力+生産的な能力)との関連を観ていくことである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① 高橋幸子、メタ認知ストラテジーは、大学生の英語リスニング力を伸ばすことができるだろうか?、『ノートルダム清心女子大学紀要』外国語・外国文学編、査読有、Vol. 37、No. 1、2013、pp. 86-93
- ② 高橋幸子、英語リーディングにおけるメタ認知モニタリングの働き、『ノートルダム清心女子大学紀要』外国語・外国文学編、査読有、Vol. 36、No. 1、2012、pp. 111-119
- ③ Sachiko Takahashi、Attribution theory, self-efficacy theory, and their role in meta-cognitive strategy training in L2 reading、『ノートルダム清心女子大学紀要』外国語・外国文学編、査読有、Vol. 35、No. 1、2011、pp. 108-116
- ④ Sachiko Takahashi、The effects of

metacognitive monitoring training on L2 reading proficiency、Sachiko Takahashi. *Proceedings of CLaSIC 2010*, 2010、pp. 783-791

[学会発表] (計4件)

- ① Sachiko Takahashi、The effects of metacognitive monitoring training on L2 reading & listening、The 10th Asia TEFL International Conference、Delhi、India、2012年10月5日
- ② 高橋幸子、メタ認知モニタリングトレーニング：大学生の英語リーディング力に与えた影響、第37回全国英語教育学会山形研究大会、山形・山形大学、2011年8月21日
- ③ 高橋幸子、<ポスターセッション>メタ認知モニタリングトレーニングが大学生の英語の受容的能力に与える影響、外国語教育メディア学会(LET)第51回全国研究大会、愛知・名古屋学院大学、2011年8月7日
- ④ 高橋幸子、The effects of metacognitive monitoring training on L2 reading proficiency、The 4th CLS International Conference、Individual Characteristics and Subjective Variables in Language Learning、Singapore、2010年12月2日

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他]

ホームページ等

<http://www.ndsu.ac.jp/staff/teacher/000203.php>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高橋 幸子(TAKAHASHI SACHIKO)
ノートルダム清心女子大学・文学部・教授
研究者番号：50299244

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし